

(書評) あるエコロジー理論家の思想と挫折

——エアハルト・エップラー著『論稿集・

40 年間の政治生活から』——

小 野 一

(Buchbesprechung) Gedankengut eines gescheiterten Ökologen
Erhard Eppler : *Komplettes Stückwerk : Erfahrungen aus fünfzig Jahren Politik.*
1996, Frankfurt/M., Insel Verlag

Hajime ONO

「この端正で、思慮深く、節度ある著者が、それほど遠くない昔には、政治活動家の情熱を奮い起こしていた人だとは、今なお信じがたい。」¹⁾ これは、ドイツのある政治学雑誌の書評に現れたコメントである。

その人の名は、エアハルト・エップラー。平和の使徒として、エコロジー論議の理論的指導者として一世を風靡した人物は、わが国でも研究者の間では知られている。それだけに、1996年出版の回想録を一瞥すれば、隔世の感というか、驚きを禁じ得ない。少なくとも、従来のエップラー像に修正が必要なことは、確かである。

エアハルト・エップラーの略歴

彼は1926年、保守的なシュヴァーベン地方に生まれる。1947年秋から49年にかけて、スイスのベルンに留学し、民主主義について多くを学ぶ。そこでの交友関係の中で出会ったグスタフ・ハイネマンは、その後の彼の政治生活における模範となった。

彼が政治の道に足を踏み入れたきっかけは、ドイツの再軍備問題である。彼は、ハイネマンの主張に共鳴し、1952年の全ドイツ人民党(GVP)設立以来の協力者となる。その後56年1月、ドイツ社会民主党(SPD)に入党する。

彼は、1961年の初当選以来76年まで、連邦議会に議席を得ていた。SPD主導政権には連邦経済協力大臣として入閣するが、74年、シュミット首相との対立により辞任する。その後、連邦での活動の重点は党務に移り、党執行部(73~89年、ただし82~84年を除く)、基本価値委員会委員長(75~92年)、綱領委員会副議長(85~89年)を務める。本稿では割愛したが、彼の政治活動のもうひとつの舞台はバーデン=ヴュルテンベルク州で、州議会議員

(76～82年), SPD 州議長 (73～81年)などを務める。党外ではドイツ福音主義教会会議での関与が重要で、会長を務めたこともある (81～83年, および 89～91年)。

彼は、そのユニークな政治的言動が注目を集め、何度か時代の象徴的人物になった。とりわけ、89年のベルリン綱領へ向けての論議の中で主導的地位にいた彼は、エコロジ的・オルタナティブ的改革を志向する、党内左派の理論的指導者と目された。

この回想録は、編年体でなく、テーマ別の叙述形式をとる。以下、それらのいくつかについて、できるだけ彼の叙述によりながらみていきたい。

エコロジー理論家・エップラー

彼が時代に一步先んじてエコロジー思考に接近していたことは、誰も否定し得ない。それを可能にしたのは何か。彼によれば、政治意識の変化とは、理論先行型の上からの変革によるものではなく、日常の経験の中から引き起こされるものである。

マルクスの天才的な思考から労働運動が生まれたのではないのと同じように、エコロジー運動も数点の天才的著作から生まれたのではない。意識の変化とは、日常の経験を通じて引き起こされるものである。……文筆家のなし得ることは、意識の変化を記述し、政治的アジェンダ化することだけである。(S. 49 ff.)

そして、「70年代にためらいながらも動きだし、90年代半ばに至ってもなお完結していないところの(彼自身の)最後の重要な意識の変化」もまた、自らの経験からの帰結であった。1968年、彼は連邦経済協力大臣 (BMZ) に就任する。

BMZ は、先進国と発展途上国の経済格差の是正、すなわち南北問題への取り組みを活動目標のひとつとした。この職務の一環として各国を視察して回った経験などをもとに、1971年には、「第三世界対策を急げ」(Wenige Zeit für die Dritte Welt) という小冊子をまとめる。彼は後年、次のように述べる。

貧困は人口の増大を助長し、いくつかの国々では20年足らずの間に人口は倍増した。そして、人々が無思慮にも「人口爆発」と呼ぶところのものは、貧困を永続化した。そこにもうひとつのサイクルが加わる。それを理解したのは、サヘルランドを数時間走り、無惨に立ち枯れた木々の間で干からびた牛の骸骨を見た時である。人口が増えれば増えるほど、エコロジー・バランスはいよいよ無造作に破壊される。そして、風水による浸食と砂漠化が急激に進行すればするほど、貧困の克服はますます絶望的なものとなる。飛行機の中から見た、地中海の巨大な赤い変色域を、私は忘れない。北アフリカの河川が、木々の伐採された傾斜地からの土砂を堆積させたのである。その傾斜地では、絶望した農民たちが穀物を栽培しようと試みた。谷の上の露岩の情景も、忘れられない。そこは今や、森が失われたばかりか、不毛の地となった。(S. 58)

やがて彼は、環境破壊はドイツにとっても無縁でないことに気づく。

最初私は、これらは南の諸国にのみ関係することだと考えていた。……70年代以来、疑

念が湧いてきた。ヘリコプターから、町や村が土地を覆い尽くすさまを、シュトゥットガルトやフランクフルトの人口密集地が急速に荒廃するさまを、見る事ができた。あるところでは、新造宅地が従来の居住区を越えて広がりを見せ、高速道路が牧草地や森や町を寸断して走り、郊外にはショッピングセンターの巨大な駐車場が広がる。私の印象は、1875年のある調査により裏付けられた。過去25年の土地利用は、人類史2000年のそれに相当するという。これが25年でなく50年であれば、我々の土地はどのような様相を呈していたらだろうか。

公用車に乗るとき、自動車交通、とりわけ貨物自動車が急速に増加したことを実感した。事故によるのろのろ運転が、ますます多くなった。

ゴミが山をなし、多くの自治体は、住民の反対運動の中、新しい処理施設の確保に奔走した。復活祭の休暇に散歩していると、農薬が悪臭を発生し、まるで化学工場にでもいるようだった。有害物質の体内蓄積に関する研究が、すでにあったにもかかわらず。害虫の突然変異により、さらに強力な化学物質が投入された。

私は、エネルギーに関し広く認められた予測について、それが何を意味するのかを考え始めた。年7パーセントの電力消費の増加とは、10年間で倍増、20年間で4倍増、30年間で8倍増を意味する。100年間では1000倍以上である。そうなれば、国土は発電所で覆い尽くされてしまう。(S. 59 ff.)

開発政策は、第三世界のみならず先進国でも、従来型の延長であってはならない。彼はこの時点で、経済成長志向を相対化するエコロジー思考の核心に、到達していた。

ヨーロッパやアメリカ合衆国を模した発展途上国の工業化は、地球全体の生物学的バランスを危うくするばかりか、場合によっては人々の生活を耐え難くするだろう。

そのことは、第三世界の工業化が妨げられるべき、ということではもちろんない。そこでは、環境の汚染・破壊への対策となるようなテクノロジーが当初から志向されねばならないのである。(S. 61)

エッブラーが時代に先駆けてエコロジー思考に到達し得たのは、経済協力大臣時代の海外経験を通じ、自国ドイツを別の視点から見る事ができたからに他ならない。彼がこの思想史上の転換をはじめて公に示したのは、72年4月11日のIGメタル(金属労組)集会で、「生活の質」に関する講演を行ったときであろう。彼は講演の中で、同年発表されて話題を呼んだ、ローマ・クラブの「成長の限界」にも言及した。

人類が見通し可能な時期に、5年前には想像できなかった限界にぶつかることは、確実に思える。有限の地球上では、資源・エネルギー、水の消費量も、人口も、際限なく増大させられない、という単純な認識に到達するまでにこれほど時間がかかったことに、将来の世代は驚くだろう。彼らは、何らのしっぺ返しもなく自然の連鎖や法則性に介入できると信じた我々に、啞然とするだろう。彼らは、今日ブラクグマティズムと称するものを、歪曲されたイデオロギーと見なすだろう²⁾。(S. 64)

かくして、60年代には自明と見なされ、72年段階でもさほど疑問視されなかったことに、疑問が投げかけられた。こうして彼は、現実主義の名の下、経済成長路線に固執する人々に対し、挑戦的な問題提起を行ったのである。

このようにエッブラーがエコロジー理論家として成長する過程は、良くも悪くも伝統的な社会民主主義的処方箋に固執する、ヘルムート・シュミット首相との相違の顕在化であった。両者の見解の相違は、70年代のオイルショックへの対応に、顕著に表れた。

彼（シュミット）が望んだことは、60年代の成長型社会の再建であった。私（エッブラー）は、こうしたことが可能だとも望ましいとも考えなかった。彼は、ケインズ氏の道具箱をもって、すなわち巨額の財政赤字により不況と戦わねばならない、と信じていた。私は、不況の背後には、借金財政などでは太刀打ちできない歴史的転換点が潜んでいるのだ、と主張した。

彼は、原油価格の突然の4倍もの高騰を世界経済の破局と考え、いかにすれば、ペルシャ湾やリビアに流入する巨額の原油売上金を、再び世界経済へ還流させられるか、ということをめくり頭を悩ませていた。私の考えでは、原油価格高騰とは支払期限の来た過去のつけであり、エコロジー的見地からは、むしろ望ましくすらある。加えて、南側諸国への権力の移動は、損失ばかりとも言えない。第一次石油危機の翌年、危機管理マネジメントなるものが取り沙汰されたことは、理解できる。しかし、後ろ向きの危機管理マネジメント、すなわち60年代の経済万能の世界を蘇生させる試みに、私は与しない。私にとって重要なのは、原油生産者に低価格を強いることではなく、高いエネルギー価格は我々の社会ではエコロジー的な利益となるものであり、またそうであるべきことを、明らかにすることであった。(S. 107 ff.)

ここからわかるようにエッブラーは、単なる危機管理マネジメントを越える何かを望んでいた。その意味で、数々の改革政策を追求したヴィリー・ブランドに通ずるものを求めていたわけである。よく言われるように、同じSPDの連邦首相といえども、ブランドとシュミットではその方向性は非常に異なっている。そうであれば、エッブラーとシュミットの間の相違も、容易には克服し得ないものであることは、明らかである。

（シュミット）首相の目的とは、野党からの反論を未然に防ぐことであった。その最も簡単な方法は、保守派の反論が予想されることを差し控えることであった。彼の所信表明は、私が大臣として行ったほとんどすべての提案を、例えば南アフリカのアパルトヘイトに関する十分に穏やかなくだりまで、あっさり無視した。「改革」というブランド時代のキーワードは、今やほとんど姿を消した。(S. 111)

1974年、エッブラーはシュミット内閣を去る。

東西冷戦と平和主義

エッブラーといえば平和主義者、というイメージを抱く人も少なくない。また、福音主義教

会やSPD基本価値委員会での行動は、ドイツ再統一の過程でも重要な役割を演じた。冷戦に翻弄されたドイツの政治状況と対峙した彼の関与を、概観しておこう。

西側軍事同盟の一翼に組み込まれた戦後西ドイツでは、NATO軍事力の国内配備、すなわち再軍備問題が、政治日程にのぼる。彼は最初から再軍備反対の立場をとっていたわけではない(S.76)。だがこれは、彼の人生の一大転換点となった。政治家になることなど夢にも考えていなかった彼が、1951年にテュービンゲンで再軍備反対の署名運動に協力したのを皮切りに、政治への道を歩んでいく。

1952年3月10日のスターリン・ノートは、私を大きく動かしした。突如として、職業、試験、大学でのキャリアといったものが、たいそうくだらなく思えてきた。そして、それは人のよい指導教授を怒らせたのだが、私は土壇場で、ダブリン大学への就職を断った。(グスタフ)・ハイネマンの政党設立計画に協力するためである。(S.78)

彼の政治への関心を大いにかき立てたスターリン・ノートであるが、当時の反共的な風潮の下で、それを真に受ける人などほとんどいない。時の首相アデナウアーも、西側への統合かドイツ統一かの選択だ、とでもいわんばかりであった。しかしアデナウアーのいうドイツ統一とは、カーリーニングラードからブレスラウに及ぶ旧ドイツ領の回復で、現実性を欠いていた。エップラーは、アデナウアーへの代案を求めてSPDの政策に興味を持ち(S.77)、ハイネマンに接近した。このような前歴からして、彼がその後ブランドの東方外交に惹き付けられたとしても、何の不思議もない。

シュミット政権末期、再軍備問題が再燃する。デタントの頃沈静化していた米ソ対立が、再び顕在化したのである。彼が党執行部の議案に反対票を投じた1979年12月の党大会について、心情的な平和主義を退けつつも、次のように回想する。

注意して聞けば聞くほど、ハンス・アベルやヘルムート・シュミットら(再軍備)条約賛成者の主張には、説得力がないように思えてきた。そして、ブランドを知る者なら、彼が党首として不本意ながら(シュミット)首相を支持している、ということに気づいたであろう。(S.44)

再軍備条約への対応をめぐり党執行部を批判するとき、彼は、米ソの軍事政策や、アメリカへの抗議が即座に「反米主義」の烙印を押される風潮に、不満を示す。しかしアメリカの大統領がカーターからレーガンへと交替する中、ドイツの再軍備もその内容を、よりタカ派的方向で変じてくる。レーガンは、従来の欧州核戦力に加え、ソ連西部の戦略拠点をも射程に含む新型ミサイルの配備を求めてきた。ドイツさらにはヨーロッパを核戦場としかねない軍備計画を前に、ついにエップラーは反対運動の先頭に立つ。

「再軍備」は、アメリカ政府により、新たな意味を付与された。私にも、1981年以降、交渉には全く希望が見えないと思われた。まず交渉。何も決まらなかったら、配備。なんとムシのいい話ではないか。再軍備条約により、ソ連は、交渉のテーブルにつくことを余儀なくされるだろう。実際そうなった。気になるのは、アメリカがこの交渉で得るものであ

る。交渉が決裂しても、アメリカは高精度のパーシング・ミサイルを手にする。このミサイルは、ドイツの地から、もうひとつのヘゲモニー国家を射程に収めているのだ。一方ソ連は、SS 20 ミサイルを保持することになる。このミサイルはもっぱらヨーロッパへ向けられ、アメリカに向いているのではない。(S. 46)

こうして彼は、アメリカの危険な対ソ核戦略からヨーロッパの平和を守る運動の中で、シンボリック人物となった。その頂点は、1981年10月10日の、ボンのホーフガルテンにおけるデモである。シュミット首相は、この行為を党規違反として処分するよう求めたが、党首ブランドは応じなかった。この行動が、彼の声望を高めるのに大きく寄与した。

その後東西ドイツは89年に再統一を実現する。一見突然の出来事のようなだが、結果的には、80年代の内外の情勢変化の中で、少しずつその準備が進行していた、とも言う。その際、SPD 基本価値委員会や福音主義教会などを通じ、彼の果たした精神的役割は無視し得ない。

彼が、ヴァイツゼッカー元ドイツ大統領らとともに、ドイツ福音主義教会会議幹部に選出されたのは、1977年のことであった。同教会は分断時代にも東ドイツとの接触を失っておらず、エッブラーにとっては、この時以来、旧東ドイツでの教会会議が日程上の優先課題となった(S. 166)。教会自体は政治活動を目的とはしないが、ドイツ再統一に際し、教会がSED (ドイツ社会主義統一党=旧東独共産党) 支配体制への反対派に結節点を提供したことは、よく知られている。彼が会った平和運動家や人権擁護団体も、左翼を自称し、宗教的・世俗的権威に対し否定的態度をとっていた。彼らはしばしば、いわば「下からの教会会議」を組織し、教会指導部に肉薄する勢いを見せた。(S. 170)

同時に彼は、SED 中枢に近い人物と継続的に接触できる位置にあった。1984年2月から数回、SPD 基本価値委員会と東ドイツ社会学者との間で意見交換の機会が持たれた(S. 174 ff.)。公認イデオロギーの階級闘争史観だけではやっていけなくなった東ドイツの研究機関が会談を申し入れ、SPD もそれに応じたのである。会談では、未来の人間労働、両国の平和共存などというテーマも話し合われ、87年8月には共同文書が発表された。

ソ連・東欧の政治改革の波は、東ドイツにも及ぶ。SED 体制の動揺が明らかになる中、両国の平和共存というテーマは時代の勢いに追い越されてしまった。それにもかかわらず、こうした討議が体制のドグマの打破に役立ったことは、否定し得ない。共同文書は、SED 党内で激しい議論を引き起こし、改革派の台頭を促したようである。また、東ドイツの教会でも同文書への期待が大きかったことを、エッブラーは伝えている。(S. 183)

1989年6月17日、彼は、旧東ドイツの崩壊を预言する演説を行う(S. 188 ff.)。その後の展開は、誰の予想をも上回り急速であった。再統一後の共和国のあり方が、突如として政治課題となった。彼は、統一ドイツの目標に関し、コール首相の想像力のなさを批判する。しかし同時に彼の不満は、自党の首相候補オスカー・ラフォンテーヌにも向けられた。

コールは東独市民を熱烈に歓迎したが、真実を隠していた。ラフォンテーヌは事実を冷静に計算していたが、次のように言うのを忘れた。「それでもなお、君たちは大歓迎だ。そ

れでもなお我々は、万人のための統一ドイツとともに建設して行くであろう」と。否、彼は忘れたのではなく、意図的にそれを言わなかったのだ。彼はブランドの忠告にもかかわらず、それをしなかったのである。(S. 191)

エッブラーのこうした評価を、ここで検討することはできない。だが周知のように、再統一後初の総選挙において、ラフォンテーヌ指揮下の SPD は、大敗北を喫する。

理念・権力・人間——象徴的人物の政治的確信の源泉

回想録の第5章は、「意に反しての道德主義者」。道德主義者エッブラーとのイメージを抱いていた読者には衝撃的ですからあるのだが、彼は、このレッテルがふさわしくないこと、自らの政治活動は倫理的動機づけによるものではないことなどを、述べる。

「道德主義者」というレッテルは、断じてそのようなものではない。70年代には——90年代とは全く異なり——道德的でありすぎることは、その逆よりも、胡散臭く思われた。しかしこのレッテルは軽蔑的であるばかりではない。私が道德主義者である証を求められることを、常々不思議に思っていたのである。(S. 101 ff.)

これは、彼が現役時代から考えていたことなのか、それとも、彼の意識に変化を及ぼす出来事があったのか。その点について、本稿で究明することはできない。だがこのテーマは、ひとりの政治家の世界観や権力観を垣間見させて、興味深い。

自分は道德主義者でなく政治家である、とはこの書物の強調するところである。実現できない美しい理想を掲げるより、目標に一步でも近づくための政治的計算のできる現実主義者。少なくともそうありたいと、彼は望んでいた。その考えは、例えば平和と軍隊をめぐる記述の中に表れている。

平和のために役立ちうる様々な手段の中で、軍事力を除外することは、私には政治的でないように思えた。……40年の長きにわたり自分にとって問題だったのは、平和を守り、創造し、確保する政治的行為である。その目的に最もかなった手段をその都度選択することを、私は望んだのである。私は、軍事的手段を信頼しなかったが、それを除外することもなかった。(S. 103)

理論と現実の乖離を戒める現実政治家ぶりは、環境問題への取り組みにおいても見られた。自分は終始一貫した反原発主義者ではなかった、と彼は言う。

党執行部内での私の態度も、1982年以降変化した。私はもはや少数派の代弁者ではなく、多数派の解説者、綱領活動と実践の媒介物となっていた。86年8月末、すなわちチェルノブイリ原発事故の4ヶ月後のニュルンベルク党大会では、もはや原子力エネルギーからの撤退を訴える必要はなかった。その反対に、次のように言って党大会に熟慮を求めたとき、私は反原発主義者の浮ついた気分を抑制したのである。原子力は政治的に責任を負いきれない技術であるとの理由から反原発決議をあげるなら、それは、多数派形成能力ある政治勢力がすでに確立された技術からの撤退を求めるという、ヨーロッパ史上例のない驚

くべき冒険である、と。それにより党は、「止めどもなき論争に突き進んでいか」なければならないだろう。その後、私がニュルンベルク党大会決議の原発撤退スケジュールに固執することは、一切なかった³⁾。(S. 152 ff.)

現実政治家に政治的計算は不可欠である。そのことはエッブラーとて例外でない。だが、政治における「道徳」というとき、人は、ある政治家の政策や政治的選択のみならず、人格そのものを問題にすることもある。次のような一節を読むとき、何も「意に反しての道徳主義者」などと謙遜しなくても、と思えなくもない。

重要なのは、道徳性ではなく、政治的効果である。新造宅地を拡張するよりも既存宅地内の遊休地を利用すべきだとの立場の者は、自分の家の見晴らしを守る目的で空地を買ってはならない。他人に対しエコロジー的理性を要求する者は、自ら鉄道で旅行し、ゴミの減量に努めるべきである。これらは、道徳的行為ではなく、政治的効果を期待する者にとっては当たり前のことである。(S. 105)

だが、道徳主義者エッブラーというイメージが増幅されたのは、彼自身の分析によれば、シュミット首相との対立を経てであった。

私の立脚点はシュミットの政治観の枠外にあったため、彼は私の政治的立場に道徳の烙印を押した。また、彼は共和国に責任を負っているが、私は——とりわけ大臣を辞任した後には——そうでないので、私の発言は勢い感情に訴えるものになった。そうしたことの故に、私は彼の目には、心情倫理主義者と映ったのである。(S. 114)

「責任」と「道徳」との対立図式は、「責任倫理」と「心情倫理」に関するマックス・ヴェーバーの議論⁴⁾を思い出させる。この議論を反芻するまでもなく、専門家としての政治家には、その理想が高ければ高いほど、責任倫理と心情倫理との緊張関係の中で冷静な判断能力が求められる。現実感覚なき道徳主義者は、政治家として失格である。この意味でエッブラーは、現実政治家たることを望んでいた。だとすれば、「道徳主義者」というイメージが本人を辟易させるものであったことは、想像に難くない。

ところでこの回想録では、シュミットやブランドとの人間関係にもかなりのページが割かれており (S. 136 ff.)、当時のSPDの内情を知る資料としても興味深い。シュミットの政敵としてのイメージが強調されがちな中で、次の一節は、あるいは意外に響く。

シュミットの私に関するコメントは、ブランドに関するそれよりも、露骨で、無遠慮で、陰険であった。にもかかわらず、それは私には苦痛にならなかった。前任者であり党首(であるブランド)に関し、彼は公然と発言できない。私に関する不快の念のほうで、ブランドへの嫌悪よりも、はるかに理解しやすかった。(S. 146)

シュミットの才能は、エッブラーも——ブランドも、そしてシュミット自身も——認める。しかしエッブラーの見地に全く理解を示さなかったシュミットに対して、あまりにも物わかりがよすぎるのではないか。これはおそらく、彼の権力観とも関連があろう。

話は1962年秋に遡る。この年、彼の全キャリアを通じての政治的態度に影響を及ぼす重要

な出会いがあった。イギリス政府はドイツの若手議員 5 名をロンドンに招待したが、その中にエップラーもいた。彼は、在独イギリス大使館職員で彼よりは若干年下の、ディヴィッド・クロンウェルと知り合った。彼らは歓談の席で意気投合した。

私（エップラー）が目標、課題、プログラムといったことについて多くを語りすぎたためであろう。ディヴィッドは言った。「政治というものは、90 パーセントがピープル（人間関係）で、10 パーセントがアイディア（理念）だ」。この言葉を私は忘れなかった。私はこの意見に反対だったが、クロンウェルは正しいのではと危惧したからである。その際、ピープルという言葉でもって彼が意味しているのは、人間関係、術策、虚栄心への配慮、弱い者を踏み台にすること、付き合い、仲間意識、一蓮托生といったことばかりでなく、自他の能力の適正な評価、同僚や仕事仲間、人々の不安や願望への感情移入能力なども含まれる。

私はディヴィッド・クロンウェルに反論した。私にとって政治とは、何かに働きかけ、課題に着手し、何かを変えることであり、しかもそれは、見取り図を描き、名前を付け、定式化し得るほどにまで事前に徹底的に考え抜かれた方向性において、なされるものだからである。私にとって政治とは、まず第一に目標であり、プログラムである。もし対象や到達目標が特定されず、認識可能なものとなっていないなら、政治という複雑なものにどうかかわればよいのだろうか？ 政治運営に、私は魅力を感じない。あまりにも多くの人が一カ所に集まること、混乱、党大会の群衆といったものは、私の気を滅入らせ、辟易させるものである。

政治は 9 割が人間関係で残りの 1 割が思想や理念やプログラムであるというのは、私が政治に参入した事情に照らしても矛盾する。…… (S. 73 ff.)

エップラーにとっては、むしろ理念が 9 割で人間関係が 1 割である。だが、ドイツ人政治家がすべて、彼のように理念先行型なのではない。それどころか、現実には、政治はより多く人間関係によって動いていることを、彼はその後身をもって体験させられる。クロンウェルと話していてエップラーが抱いた不安は、杞憂ではなかった。例えば、カナル・アルバイターという組織がある (S. 84, 他)。SPD 連邦議会議員の保守派サークルであるこの組織⁵⁾は、結束が堅く、党内人事や政策への影響力も強かった。理念重視の行きすぎには、彼自身回想録の中で言及している。

政治家に対し政治課題への実務的傾注が期待されることは、正当である。だが行きすぎもあり得ることを、おそらく私の例が示している。私自身も、そのような説明を試みてきた。だがそれでは弁解にはならないし、バランスを保つためにエップラーのような政治家も必要なさ、と言ってみたところで、事情は変わらない。確かに一面性は、相互作用により緊張感や活力を生み出し、国民政党に全体として彩りを与えるであろう。しかし一面性はやはり一面性なのである。(S. 97)

ここで我々は、マキャベリやヴェーバーをはじめ多くの人に論じられてきた古典的問題、す

なわち理念・倫理と権力との間の緊張関係という問題に、突き当たる。もし政治が社会的価値の権威的配分だとすれば、現実の利害関係ないしは権力関係の中でしか、理想は追求し得ない。それではエップラーの権力観は、どのようなものであろうか。

権力に関する最も簡単にして明解な定義は、彼によれば、他者をしてある一定の行動へと動機づける能力、となる。「私の青年時代、権力とは、命令でき、命令されないことであつた。私は、中尉の下士官に対する権力をうらやんだものである。その下士官は、自分の気まぐれで、罰として私に何回も腕立て伏せを強要したり、自己批判を唱えさせたりした」。権力は彼にとっても、常に魅力的なものであつたという。(S. 199)

しかし彼はその後、現実政治におけるいわば「権力者の無力」(S. 195 ff.)を体験する。例えば、内閣——シュミット首相の下ではなおのこと——において現実には何もできないことが、大臣を辞任した理由であつたし (S. 209), 1972 年選挙勝利後の絶頂期のブランドが実は大変に悪い状態にあつたことも見ている (S. 144)。狭い意味での政治権力の行使という点では、彼は成功したとはいえない。だが皮肉と言うべきか、彼の声望、とりわけエコロジー理論家としてのそれは、むしろ役職を離れたときに高まったのである。

権力に関する考察において、彼は、「オリジナルな権力」と「借り物の権力」という分類を行う (S. 231 ff.)。前者は、多くの人の希望がひとりの人間に結びつくときに生じる。それは、譲渡されたり奪われたりするものではない。そのような力を持っていた代表的な例は、他ならぬブランドである。人々は彼を必要としている。ブランドはブランドであり、それは彼が役職者であろうとなかろうと変わらない。はるかに少なくではあるが、「オリジナルな権力は、私(エップラー)にあっては、借り物のそれを投げ捨てるにつれて増大した」(S. 237)。党内外に、彼に何かを期待する人が少なからずいたのであり、彼の文章や発言が広く引用されるに至り、彼は目に見えない権力に到達したのである。

このように、エップラーの権力観は、アンビヴァレントでありパラドキシカルである。これを彼のユニークな政治的キャリアと重ね合わせてみると、意表をついた回想録に込められたメッセージを読み解くカギが得られるように思える。彼は道徳主義者と呼ばれることを好まなかった。彼の関心は、具体的問題における政治的実効性だったからである。ヴェーバーの用語法を借りれば、心情倫理と責任倫理との緊張関係の中で改革の可能性を追い求める現実政治家こそが、彼の目標だった。しかし現実には、実践家としては見るべき成果をあげられず、彼の業績はあくまでも理論家としてのそれにとどまった。その意味で彼は、「意に反しての道徳主義者」だった。これが、理念主導型のエコロジー理論家の限界と言うべきか。彼が若手議員だった頃聞いたクロンウェルの言葉が、再び返ってくる。「政治というものは、90 パーセントがピープルで、10 パーセントがアイディアだ」。

こう考えると、論敵シュミットへのアンビヴァレントな態度も、理解に難くない。冒頭に掲げた書評が、エップラーが模範としたのがむしろシュミットだったとの立場から次のように言うのは、正当である。「確かにエップラーは、ヘルムート・シュミットの退場に大きな役割を果

たした。しかし、そのことは彼にとり、長い目で見れば、手放しで喜べるものではなかった。なぜなら彼は、その性格のゆえ、シュミットに取って代われるような器ではなく、そのため世論の力の誘惑の中へと逃避せざるを得なかったのだから」。⁶⁾

80年代のエッブラーの思想とその変遷

80年代はドイツの政治史上大きな変動期だったが、その影響を最も強く受けたのがSPDだった、と言っても過言ではない。60年代末から70年代に高揚をみた新しい社会運動が、緑の党として政治システムに定着した。オイルショックを機に低成長時代に入り、ケインズ主義的経済政策を可能にする条件が消失する中で、西欧各国で社会民主主義勢力が政権から退出し、ドイツでも1982年以来16年間、保守政権が継続する。言うまでもなく、80年代末には冷戦体制が崩壊し、東西ドイツは再統一を成し遂げた。そうした中、時代の象徴的人物の思想にも変化がみられる。

シュミット内閣を去って以来、連邦レベルでのエッブラーの活動拠点は、前述の基本価値委員会であった。この組織はその後、ベルリン綱領準備のための母胎となる。その間の彼の行動は、前述の平和デモへの参加といい、81年末のレーヴェンタール論争⁷⁾といい、基本価値委員会の一連の報告やベルリン綱領⁸⁾といい、シュミットに対抗する党内左派の領袖、ないしはエコロジー理論家としてのイメージを作り上げるに十分であった。しかし回想録によれば、エコロジー的目標は最優先課題ではなかった。この時代の彼の関心は、何にもまして党内統合にあったという。

主観的意図はどうであれ、一時期左派のシンボルだったことは、彼自身否定しない。

シュミット政権時代、マスメディアはしばしば、私を党内左派のスポークスマンと考えた。それは全くの誤りというわけではない。……社会民主主義的政治の中にテクノクラートの危機管理マネジメント以上のものを期待する人々の多くは、私が彼らの最良の代弁者だと考えたのである。(S. 148)

しかし彼の立場は、左翼―右翼の図式を越えるものだという。それを説明するために、彼は「価値保守主義」と「構造的保守主義」という概念上の区別を行う。

保守主義には、ニュアンスのみならず、未来像に関して相対立し合うふたつの潮流がある。一方は、日常生活における価値の保全を欲し、他方は、経済的・政治的権力構造を強化し、例えば不断の経済成長に必要なあらゆることを促進する。かかる「構造的保守主義者」たちは、自然や健康、連帯、公正など、「価値保守主義者」たちには不可侵のものを、躊躇することなく経済成長のための犠牲にする。(S. 149)

彼の立場が構造的保守主義と相容れないことは、言うまでもない。価値保守主義には、全く同意見ではないが、理解を示す。

私はゴードスベルク社会民主主義者⁹⁾のひとりとして、自由・公正・連帯のスローガンをただ保持するのではなく、実践したいと思っていた。より多くの自由、より多くの公正と連

帯を勝ち取りたいと望んでいた。しかし同時に私は、次のことを明らかにしておきたかった。政党政治的に組織された保守主義者が、多くの人が保全を望むものをもはや守れず、またその意思もないのなら、社会民主主義が諸価値の保全という政策を引き継がねばならない。(S. 150)

70年代の価値観の変動を、イングルハート¹⁰⁾の議論などを手がかりに理解してきた者には、ここに引いたような議論は唐突に響くかもしれない。ここでその点に深入りすることはできない。本稿で重要なのはむしろ、彼の議論が主として戦術的計算からなされていることである。

この一対の概念を使うに際しては、戦術的意味合いもある。中央党左辺における多数派(フリードリヒ・ナウマン)は、西暦2000年を挟んだ50年間には、労働運動が価値保守主義者と手を組んだときにのみ、生成しうる。私はこれを、SPDにおいて行おうとした。それを妨害したのは、シュミットのみならず、エムケのような「左派」もまたそうであった。今や赤と緑の連合が問題とならざるを得ない。それは、共和国にとって必ずしも悪いものではないし、(社会民主)党としても好都合である。同党はもはや、多数派とはなり得ない。加えて、左翼陣営内部で緑の党がSPDの犠牲の上に勢力拡大を行うことは、まず避けられないからである。(S. 150 ff.)

赤緑連合への肯定的評価は、改革よりもむしろ戦略的な意図から出ている。ここからは、エコロジストないしは左派改革派としてのエップラー像は浮かび上がってこない。

だとすれば、少なからぬSPD研究者や同時代人、とりわけ、「1968年世代」を中心に、社会民主主義に危機管理マネジメント以上の何かを望んだ人たちのエップラー像は、間違っていたのだろうか。あるいは彼の思想に、その後変容がみられたのだろうか。もしそうだとすれば、それはなぜか。これについての検証は、各時代の資料の文献学的考証により初めて可能となる。ただ、考察の手がかりは、回想録の中にもある。シュミット政権末期の中距離核ミサイル配備をめぐる党内論争の結末に関し、彼は次のように言う。

左派は私の線に従った。ヘルムート・シュミットも、ケルン(党大会、83年11月)の冒頭演説の中でアメリカ合衆国の交渉のやり方を批判したため、私は次のような確認をもって、演説を始めることができた。「過去4年間、我々のうちの誰が正しかったのか。この党大会はそれを決定できないし、するべきでもない。またそうする意志もない。再軍備条約をめぐる論争は、本日をもって過去の出来事である。」

ケルン党大会以来、私には、左派よりも党全体のほうが重要になった。……私は、「フランクフルター・クライス¹¹⁾」に何も求めず、左派を自己目的とは考えなかったので、同グループの議論にはほとんど参加しなくなった。1982年以降党内左派が重要性を減じ、退屈なものとなったのは、必然である。彼らの要求のうち達成可能なものは、1983年から89年までの間に達成された。また、ますます明らかになる理論と実践の乖離、プログラムと行動の乖離に対してなすすべを知らなかったのは、他のグループと変わりなかった。(S. 152)

80年代以降、左派から距離を保った彼の最重要課題となったのは、党内統合である。例の基本価値委員会での活動を買っていたのも、この課題であった。この点で彼は、たいそう満足したようである。

基本価値委員会の会合の成功は、党史の重要な1ページである。こうしたさまざまな党内グループが一同に会しての理論的究明なしには、70年代にみられた分極化は克服し得なかっただろう。老リヒャルト・レーヴェンタールがそのためにどれだけ貢献したかを、私は誰よりもよく知っている。

基本価値委員会で、私は精神的悦楽、といったものを感じた。かくも方向性の違った人々が相互理解と議論に努め、それがうまくいったことを、他のどの政治的会合でも経験したことがない。面白半分に独りよがりの意見を出したり、挙げ句の果ては新聞を読んでいる者など、そこにはいなかった。知的な身分関係などなしに議論がなされ、誰にも理解できる文書の作成が目指された。……

ここ基本価値委員会こそが、「ピープル」と「アイディア」との間の緊張関係が、後者を求める共通の努力が人々を継続的に歩み寄らせることを通じて解きほぐされた、唯一の場所であった。(S. 95)

とりわけ81年に出版された基本価値委員会第5報告¹²⁾は、社会的自助の重視による福祉国家のエコロジー的改造など、従来型の社会民主主義を超える発想を含んでいて、物議をかもした。その基本価値委員会が、多様化する党内諸潮流の統合に貢献していたとは、意外に思われるかもしれない。しかし、基本価値委員会が党内左派ないしはエコロジー派の主導の下、改革志向の綱領草案を練り上げていったという一面的理解がもしあるなら、修正が必要である。同委員会の党内統合という機能が、もっと重視される必要がある¹³⁾。

その後SPDは、1989年のベルリン綱領の草案づくりに本格的に着手する。そのために設けられた綱領委員会で、エップラーは副議長を務める。だがそこでの仕事は、基本価値委員会でのそれとは違って楽しいものではなかった。

私の政治課題への実務的執着は、新綱領作成の際にも役立った。その作業は、1984年から89年まで約5年を要した。おそらく私は、基本価値委員会委員長として、方向性の違う意見を辛抱強く討議して説得力ある文書を仕上げることに、慣れっこになっていたのだろう。私にとり重要だったのは、時宜にかなった、統合力のある、それでいて明解で読みやすい綱領を作成することだった。綱領委員会、とりわけヴィリー・ブランドの下ではなくオスカー・ラフォンテーヌの下に会した第二委員会のメンバーが、個別要求の貫徹にしか興味がないと知ったとき、私のショックは小さくなかった。すなわち、労働組合、女性、社会政策従事者、欧州議会議員、青年、高齢者、左派、右派、といったグループの個別利害。自らの特殊な見解や要求を可能な限り盛り込もうとする野心的な者も、何人かいた。短く読みやすい綱領を作ることなど、眼中になかった。副議長として私がこの憎まれ役を買って出なければ、誰もこの綱領の何たるかをわからなかっただろう。そこまでして

神経をすり減らす価値があるのか？私は、社会民主党における新綱領の意味は、以前の綱領の場合と同じだろう、と信じていた。私が失望したのも、道理である。(S. 98 ff.)

彼の怒りは、全党の統合よりも個別利害のみに関心のある人に向けられる。

強烈な利己主義の乱舞 (Tanz um das vergoldete Ego) という状況下では、プログラムなど単なるお荷物である。1989年12月の特別党大会でオスカー・ラフォンテーヌが、冒頭演説の中で、(ベルリン) 綱領にひとつも触れなかったとき、私は国民政党的存続可能性について、すでに懐疑的になり始めていた。(S. 99)

こうした状況の下、SPDの将来見通しは明るくない。

不幸なのはプログラムの欠如ではない。いかなる綱領——それが自ら起草したものであれ——も自らのプロフィールの障害物としか思わないような指導者が、問題である。ナルシズムと国民政党とは両立しない。少なくとも長期的には。左翼の国民政党をかけがえのないものとする人々がこのことに気づくのは、いつの日のことであろうか。手遅れになる前にその日が来ることを、私は望む。(S. 158)

基本価値委員会や綱領委員会でエップラーが追求したのは、党内統合であった。そして、彼の意図が実現できず、深い挫折感を味わったのも、この方面でのことであった。党内統合は今日のSPDにとり、深刻にして困難な問題である。しかも、個人主義的傾向の強まりはいわゆる「1968年世代」以降顕著にみられ、これが政党政治に及ぼす影響も小さくない。プログラムの議論を通じての党内統合という彼の意図は、今日の状況では、あるいは不適切な判断だったのかもしれない。ここにも、理念が9割で人間関係が1割という政治信条と、現実政治との不一致の前に苦悩する、現実政治家を志向したがそうはなれなかった道德主義者の姿が、浮かび上がる。

おわりに

回想録のあとがきでエップラーはいう。第三世界、エコロジーおよび平和という、相互に関連した3つの問題が、彼の政治活動の主要テーマだった、と。かつて彼は、これらの領域で斬新な問題提起を行い、自ら行動し、改革を求める人々の理論的指導者と目された。その意味で彼は、ひとつの時代の象徴的人物であった。

90年代も後半の今日、かつてのような改革の情熱はない。彼の問題提起は、少なくとも現時点まででは、実戦可能な政治課題としてプログラム化されることはなかった。それどころか、昨今の急激な状況変化の中で、彼が提起したような問題はあまりにも等閑視されている。問題は未解決だというのに。

財市場、資本市場、そして何よりも労働市場のグローバル化により、我々は、エコロジーが国際競争力を損なう障害物と見なされるという、憂慮すべきパニック状態に陥っている。ここではもはや政治は存在しない。産業活動のためにはいかなる政治的行為も控える、ということが、経済競争力の証左とされている。戦略家の頭にあるのは、市場経済に

エコロジー的ルールを課すことではなく、社会的ルールの解体である。そうすることによって中期的には最良のカードを無駄にしていることに気づいている者は、ごくわずかである。(S. 291 ff.)

あるエコロジー理論家の挫折。彼は、悪循環を断ち切るかすかな希望を示しつつ、回想録を閉じる。そこにはかつての生气あふれる問題提起はない。

以上、エップラーの 1996 年出版の回想録を書評した。その動機は、まず第一に、この本が、エコロジー理論家エップラーというイメージを修正するのに、十分なほど衝撃的な内容をもっているからである。だが、彼の思想とその現実政治の中での挫折は、単なる人物伝的関心を越え、ひとつの時代を総括的に理解する重要な手がかりでもある。

最後に、筆者が本稿の標題に込めた意図を説明しなければならない。政治学の、あるいは社会思想的な文脈において「挫折」という場合、何を意味するのか。筆者は、政治戦術と思想の次元を区別して評価すべきと考えている。あくまでも結果責任原則によって評価される政治の世界では、当初見込まれた政治的効果が達成されなければ、失敗なり挫折なりと判定されよう。だが思想としての次元では、もう少し長期的視野に立った評価が求められる。ある思想が時代の問題状況に有効な回答を提示できなかったなら、当座のところそれは思想的敗北である。だが、そうした思想を必要とした問題状況が未解決のままであれば、その思想的営為は完結していない。この場合、敗北したのは「ひとつの」思想的実験であり、「実験」そのものではない。エコロジー問題とは、まさにそうした性格を持った現在進行中の問題なのではないか。筆者が思想的「挫折」という場合、その意味するところはこのようなことであると、理解されたい。

文 献

- 1) Patrick Horst, 1996 : Erhard Eppler : Zuflucht zum Aphrodisiakum öffentlicher Macht. in : *Zeitschrift für Parlamentsfragen (ZParl)*, Heft 4/1996, S. 774
- 2) ローマ・クラブのメンバーのひとりメドゥズの文章をエップラーが引用したもの
- 3) 当時の党大会議事録の該当箇所を読み返すと、随分違った印象を受ける。彼の発言は、原発に勤務する者の立場から期限付き撤退に再考を求める代議員に反論する形でなされたものである。彼は原発からの撤退を正当化し、同大会の代議員から喝采を浴びている。SPD-Vorstand : *Protokoll vom Parteitag der SPD in Nürnberg*, 25.-29.8.1986. S. 314 ff.
- 4) マックス・ヴェーバー『職業としての政治』(協圭平訳、岩波文庫版、1980)、98 頁
- 5) SPD 党内のインフォーマル・グループについてはミュラー＝ロンメルの実証的研究がある。Ferdinand Müller-Rommel : *Innerparteiliche Gruppierungen in der SPD : Eine empirische Studie über informell-organisierte Gruppierungen von 1969-1980*. Opladen, 1982 カナル・アルバイターについては、S. 161 ff.
- 6) Horst, a.a.O., S. 777
- 7) Perer Lösche/Franz Walter : *Die SPD : Klassenpartei-Volkspartei-Quotenpartei : Zur Entwicklung der Sozialdemokratie von Weimar bis zur deutschen Vereinigung*. Darmstadt, 1992, S. 121 ff. 邦訳書 : 岡田浩平訳『ドイツ社会民主党の戦後史/国民政党的実践と課題』(三元社、1996) 165 頁～
- 8) エップラー自身によるベルリン綱領の解説は、Erhard Eppler : *Plattform für eine neue Mehrheit : Ein Kommentar zum Berliner Programm der SPD*. Bonn, 1990. なお、わが国におけるベルリン綱領の

紹介・解説は、永井清彦編著『われわれの望むもの/西ドイツ社会民主党新綱領』（現代の理論社、1990年）。他に、山本佐門『ドイツ社会民主党日常活動史』（北海道大学図書刊行会、1995年、201頁～）など。

- 9) 1959年のSPD ゴーデスベルク綱領を立脚点とする者、という意味
- 10) Ronald Inglehart, 1977: *The Silent Revolution: Changing Values and political Styles among Western Publics*. Princeton. (邦訳: 三宅一郎/金丸輝男/富沢克訳『静かなる革命/政治意識と行動様式の変化』, 東洋経済新報社, 1978); Ders., 1983: Traditionelle politische Trennungslinien und die Entwicklung der neuen Politik in westlichen Gesellschaft. in: *Politische Vierteljahresschrift*, Heft 2/1983; Ders., 1989: *Kultureller Umbruch: Wertwandel in der westlichen Welt*. Frankfurt/New York. (邦訳: 村山皓/富沢克/武重雅文訳『カルチャーシフトと政治変動』, 東洋経済新報社, 1993, 英語版からの翻訳) など
- 11) 党内左派非公式グループのひとつ。Müller-Rommel, a.a.O., S. 69 ff.
- 12) とりわけ話題を呼んだ第5報告「労働運動と社会的意識および行動の変化」の要約テキストは, *Der SPIEGEL*, Nr. 5/1982, S. 20 ff.。翻訳は、永井前掲書に収録 (150頁～)。
- 13) ゴーデスベルク綱領以後のSPDの綱領論議に関し、プログラムそれ自体よりも党内統合という観点を重視した分析は、ドイツのSPD研究ではむしろ主流であるように、筆者には思える。ここに、日独のSPD研究の力点の置き方の違いを感じざるを得ない。

(本学講師)